

示し、在來の道路と雖、此の標準に據りて漸次改良を加へしむることとなり、茲に地方道路の改良其の緒に就くに至れり。

其の後交通の發達と道路の重要性に鑑み、先生は法律に依りて道路の新設、維持、管理竝に費用の負擔等を規定するの必要を認め、公共道路法を立案して、明治二十九年第十回帝國議會に提出せられしが、當時鐵道萬能時代にして、道路の利用は地方局部的の交通に止まり、一般の注意を惹くこと尠く、且費用の負擔等に就きて議論多く、終に成立せざりしは遺憾なりき。然れども大正八年四月法律第五十八號を以て公布せられたる道路法の骨子は、實に當時先生起草の法案に胚胎せるものなり。

## 第五章 學校教育

### 第一節 帝國大學

明治十三年十月、先生佛國留學より歸朝し、同十四年十月内務省御用掛を以て文部省御用掛を兼務し、東京大學理學部講師を囑託せられ、數學教授を擔任す、是れ實に先生が大學に關係せられたる始なり。斯くて先生の講師たること一年有餘、翌十五年十一月、文部省御用掛の兼務を辭し、一意内務技師として盡力せられ、同十七年十二月新潟在勤を命ぜらる。

明治十九年五月、工科大學教授兼工科大學長に任ぜられ、新潟より東京に移り、内務技師を兼任せらる。是より先、同年三月勅令第三號を以て帝國大學令を公布せられ、帝國大學の開設と同時に東京大學工藝學部及び工部大學校を合併して、新に工科大學を置き、東京大學に於ける從來の法・理・文・醫と共に五分科大學とし、各分科に學長を設け、之を總轄するに大學總長を以てし、理科大學長菊池大麓氏一時工科大學長心得を兼ねたりしが、先生の就任を見るに至りて始めて専任の工科大學長を得たり。

工科大学創設前には、東京大学工藝學部關係の卒業生五十九名、工部大学校の卒業生二百十一名にして、新設當時の在學生は東京大学の二十一名、工部大学校の五十九名なり。而して本郷に於ける帝國大学の校舎は、法・理・文・醫四分科大学に於て使用し、工科大学を容るるの餘地なかりしを以て、暫く虎の門内舊工部大学校を其の校舎に充てたりしが、明治十九年八月文部省は新に工科大学校舎を本郷の構内に建築すべく着手し、同二十一年七月落成を告げ、同月虎の門より移轉を完了せり。

工科大学の成立は、歴史及び校風を異にせる二大学校を合併せしを以て、其の統制は他の分科大学の如く單純ならず、最初の専任學長としての先生は、學部内の融和、教職員の進退、學科の整理を始め、各般の事項に關して細心の注意を拂ひ、創業の功を全うせざるべからざる重大任務を帯び、極めて困難なる位地に立たれたり。之を其の一例に見るに、學制發布に先だち工部大学校在學生一同は特色ある同校の廢止を惜みて學生大會を開き、善後策を講じたるが如き、又土木學教授英人「アレキサンダー氏」が工部大学校廢止を遺憾とし、工科大学長心得たりし菊池氏と争ひたるも容れられず、遂に職を辭して歸國せしが如き孰れも當時の事情を物語るものなり。其の際工部大学校土木科學生は全部修學旅行中にして此事ありしを知らず、歸校後之を聞き、信賴せし恩師の辭職を痛惜し、中央卓上に「アレキサンダー」教授の著書を置き、學生一同之を圍みて撮影し、遠く英國

の同師に贈呈して、深く惜別謝恩の意を表したりき。斯かる時代に先生は最初の専任學長となられたるを以て、學部内には尙「アレキサンダー」氏と意見を同じくする者ありしなるべく、況や當時の諸教授は、概ね工部大学校出身者にして、方面を異にせる先生の來りて學長たるをや、其の間に多少感情の融和を缺くものありしを免れず。然れども先生は資性極めて圓滿滑脱敢て他と争はず、部内を統合し、人心を收攬し、衆議を一和するの點に於て、確に卓絶せる力量を有せられたるを以て、其の處置公平にして間然する所なく、指導亦懇篤にして衆望の歸する所となり、幾もなく學部内の一致融合を來たして、吾等の良學長を得たりと歡迎せらるるに至れり。

之を學科の整理に見るに、舊工部大学校に於ては土木・機械・探鑛冶金・應用化學・造船の五學科を設けたりしが、工科大学に於ては兩者を綜合して、土木・機械・造船・電氣・造家・鑛山・冶金・應用化學の八學科とし、後更に造兵、火藥を加へ、又鑛山と冶金を合して探鑛冶金となし、明治二十六年九月講座制の施行せらるるや、土木工學四講座、機械工學二講座、造船學二講座、造兵學一講座、電氣工學二講座、造家學三講座、應用化學二講座、火藥學一講座、探鑛冶金學三講座、材料及構造強弱學一講座、合計二十一講座を置けり。此講座の決定に關しては、教授間に議論ありたるも、學長として先生之れが折衝の任に當り、遂に圓滿なる解決を見るを得、其の後明治二十九年五月、機械工學・應用化學を各



明治二十一年新築の工科大学校舎

三講座とし、採鑛冶金學を四講座とし、合計二十四講座となりしも、亦先生の選擇決定する所あり。而して先生の方針は單に學者を養成するに止まらず、科學的技術の進歩を圖るに在りて、當時我日本海軍に於ける技術指導者たりし佛人「ベルタン」氏の風格を推獎せられ、常に諸教授に向つて、我國工學界に於て發明或は新案等の企畫研究の爲には、同氏の如き科學的技術を尊べる學風を必要なりとして之を鼓吹せられ、先生退職の後も工科大学に於ては此方針を繼紹し、遂に今日の成果を見るに至れり。

又工科大学新設當初に於て、待遇上に關し教授間に不平あり、學長たる先生の苦心容易ならざりき、從來工部大學校は工部省の所管にして、多數の官費生あり、又工學普及の爲、特に卒業生

の初任月俸を一等參拾圓、二等貳拾五圓に規定したるも、東京大學に於ては此等の規定なく、高給を以て採用せられたる關係より、自然兩校出身者間に待遇上の厚薄を生じたり。然れども兩校合併の直後に在りては、俄に此差別的待遇を排除するを得ず、先生、内には不平の教授助教を慰諭し、外には他の各學長に向つて機會ある毎に此差別的謬見を説き、其の緩和に努められたる結果、先生の和協の才能と、異常の努力とに依り、工科大学教授の待遇は次第に高められ、他と均衡を得るに至り、講座制の決定せられたる明治二十六年頃には、差別的觀念は全く消滅したり。

又先生の苦心せられたるは、教授助教の補充難なりき。即ち明治二十一年頃より我國に於て各種の工業起り、大學教授たるべき適任者は、頻りに企業家の招聘する所と爲れるを以て、先生は之れが補充其の人を得るに容易ならざる苦慮を費せられたり。例へば土木工學科に於て教授白石直治氏は、明治二十三年十月關西鐵道株式會社々長に聘せられたるを以て、同月京都府技師田邊朔郎氏を教授に任じ、十一月工學士中山秀三郎氏を助教に任じ、土木工學を分擔せしめたるが如き、同二十四年二月先生は土木局長事務の多忙なる爲、講座擔任を辭し、清水濟氏内務技師を以て兼任教授に任命せられ、先生の講座を擔當せられたるに、同二十六年七月清水教授病歿し、之れが後任者を求むるに當り、大學に於て望む所の適任者は、孰れも皆工業界に於ける重要なる地位に在りて應ぜず、遂に其の人を得ずして、已むなく別に助教を養成し、以て補充するに決したるが如

き、實に先生の苦心せられたる一例なり。

是より先、明治二十一年十一月、先生山縣内務大臣に隨行して歐洲に赴くに當り、願に依りて一時工科大学長を免ぜられ、大學總長渡邊洪基氏代つて工科大学長事務取扱を命ぜられしが、翌二十二年九月先生歸朝するや、十月再び工科大学長に任ぜられ、先生の聲望益々加はり、各分科大学長の間に重きを置かれたり。明治二十四年五月 露國皇太子殿下我國に來遊せられ、端なくも滋賀縣大津驛に於て不慮の難に罹らせらるるや、明治天皇陛下深く宸襟を勞し給ひ、畏くも直ちに御親ら御西下御慰問あらせられ、帝國大學に於ても慰問使を差遣せんとす、偶々渡邊總長疾あり、衆望の歸する所先生選ばれて總長教員及び學生一同の代表者と爲り、急駛大津驛に到りしに 皇太子殿下既に神戸港内の御召艦に還啓せられたる後なりしを以て、直ちに又神戸に到り、露國公使を経て邦文及び佛文の御慰問狀を捧呈す、其の邦文のものは左の如し。

日本帝國大學總長教員學生等一同ハ我

天皇陛下ノ殊ニ親愛セラレ我日本臣民ノ尤モ尊敬スル

露國皇太子殿下ノ不慮ノ御遭難アラセラレタルヲ聞キ驚愕ニ堪ヘス憂歎已ムコトナシ仍テ急ニ總代ヲ遣シテ

殿下ノ御安否ヲ伺ヒ併セテ

尊體ノ迅速御安寧ナランコトヲ祈リ奉ル

翌日更に先生は、代表の資格を以て露國公使に面接し、改めて御慰問の辭を述べ、其の任務を全うして歸京せられたり。

學長を以て教授を兼ねられたる先生は、土木工學科中の河川運河港灣を擔當し、毎週三回各一時間半の講義を授けられたるが、別に内務技師としての職務に執掌せられたるを以て、晝間殆んど寸暇なく、其の自宅に於ける講義の準備は往々にして夜半を過ぐることもありしと云ふ。而も當初に於ける工科大学は虎之門に在り、其の頃先生の寓居は下谷根岸に在り、迅速なる人力車を以てするも猶一時間餘を費さざるべからず、其の匆忙想ふべきなり。工科大学の本郷へ移轉の後も亦土木局長として更に多忙を加へられたるが、忙中閑あり、動中靜あり、以て其の嗜好せらるる謠曲能樂を樂むの餘裕ありしが如きは、人をして精力の絶倫なるに驚かしめたりき。

今夫れ學生より見たる先生に就きて二三を擧ぐれば、先生の講義は概ね日本語と佛蘭西語の混合にして、語調は頗る急なりしも、其の聲は大にして力あり、熱籠りて聽者を動かし、往々時間を超過するも我を忘れて講義を繼續せらる、然れども何人も不平の色なく、皆曰く、先生は講義に熱心にして、其の講義は最も善く諒解するを得たりと。

又先生の學生を遇すること理に正しく情に厚く、且懇切にして指導に倦まざること慈父の如き

ものありき。當初先生の大學に於ける試験法は、口述試験にして、二人づゝ試験場に呼出し、一人にはスケッチを與へ、一人には口頭試問を行はる。此試問に於て答辯聊か冗長煩雜に亘れば、先生從つて質問を續發せられ、一人にして長時間を要すること屢々之れあり、而して此間先生遂に其の試験なるを忘れ、一方のスケッチを見て曰く、我輩もスケッチは下手なるが、君も亦下手なり、此處は斯くせざるべからずとて、試験を度外に措き、自ら之れを修正せらるることもありて、學生に對する情味の濃かなること他に其の比を見ずとは、當時學生たりし工學博士中山秀三郎氏の實驗談なりき。

中山博士又曰く、初め試験は二人宛にして交代出入するを以て、前者に出題せられたるスケッチは後者之を知るが故に、再び出題せられざるは明かなり、余は港灣工學の試験に於て、此等の關係より次の問題は必ず英吉利の「ドバー」防波堤の断面なるべしと推測し居たるに、試験に臨むや果して的中したり。此断面は天然石を使用するを以て細密なる寸法を要するも、余の記憶は充分なりしに依り、其の細密なる寸法を悉く記入したるに、先生之を見て曰く、「君は山を張つて來たから不可ない、もう一遍だ」と、新に別問題を出されたることありき。其の判斷力に富まるること斯くの如く、又事物の真相を觀破せらるるの明、亦概ね此類なりしと。

工學博士丹羽鋤彦氏亦當時の學生たり、人に語つて曰く、先生は非常に多忙なりしを以て、後には時間の節約上より口頭試問を廢し、總て筆記試験を行はれたり、而して當時學生の答案は概ね英文を用ひしも、先生は英語は迷惑なりとて、日本文に改め、佛蘭西語の混用は妨げざりき、即ち先生の講義も亦然りしなり。但し其の専門に屬する術語に至りては主として佛蘭西語を以て指示せられたり。又先生は常に學生の實習に注意せられ、各方面に交渉して工場見學の便宜を求め、或は特に手當の支給を依頼して、學生旅費の負擔輕減に勉めらるる等斡旋努力せられ、同時に其の研究の効果を完からしめんが爲、深く留意し、修學旅行に際し、學生を誡むるに三人以上一團となるべからざる事を以てせらる、蓋し圍碁、トランプ等の如き遊技に耽りて、勉強を妨ぐるの弊を排除せられんとするに在り。而して學生も亦能く此旨を體し、其の旅行の日程の如きも、甲組と乙組と同うせず、又互に其の實習の場所を異にするを例としたり。

學問研究以外に於て先生の最も憂へられたるは、學生と高利貸との關係なりき。當時學生中には高利貸より借財し、彼等の惡辣手段に弄せられ、殘酷なる悲境に陥りて、遂に學業を廢し、其の前途を誤れる者なきにしもあらず、先生之を教授會に諮り、新入學生に對する訓示中、高利貸の一事を加へんことを以てせられ、教授會之れに賛同し、爾來毎年必ず其の訓示中に「學生は、高利貸から金を借りたらち仕舞ひだぞ」と、力を強めて諭さるるを常としたり。而して此訓示は次代の學長辰野金吾氏に至りても、亦同じく蹈襲せられたり。

先生は又學生の學資補給に關し特に盡力せられたり。明治十九年帝國大學令の發布と共に各大學の月謝は一躍して一箇月金貳圓五拾錢に増額せられしは、當時一般の學生々活に比し突飛の増加にして、殊に苦學者の多き大學々生の困難名狀すべからざるものあり。大學に於ても詮議の末貧困者に對し特に一箇月金壹圓に減額することとなりしも、此恩典は當時在學中の者に限られ、今後入學の學生に及ばず、從つて學資不充なる學生の前途に對しては頗る苦痛を與へたり。茲に於て大學當局は優秀學生の就學を便利ならしむる爲、貸費生の制度を設け、官私各方面に勧誘し、或は無條件の獎學資金を求め、或は卒業後就職豫約の條件を以て貸費せしむる等、學資を補給して學生就學の便宜を講ぜられしが、先生は此點に關し工科大學々生の爲、特に斡旋奔走の末、内務省海軍省遞信省を始めとし、民間有力者より多數貸費資金の申込を受けられ、工科大學に於ては他の分科大學に比し最も多數の貸費生を養成することとなりしは、全く先生努力の結果に外ならず、斯くして優秀學生の爲非常の便宜を與へられたることは、當時工科志望學生の最も感激せし所なりき。

先生が後進の爲に道を開くべく、學長辭任の意を漏らされたるは明治三十年にして、濱尾新氏大學總長たりしが、其の辭任を惜み、一日濱尾氏大學よりの歸途、先生を本郷弓町の邸に訪ひて留任を勸む、時に日暮に近し、先生以爲らく饗するに晚餐を以てすれば、談更に長きに及ぶべしと、終に之れを饗せざりしに、濱尾氏の熱誠なる先生をして其の意を翻へさしめずんば止まずと爲し、對談

折衝午前零時に至るも決せず、乃ち更に他日を期せられたり、聞く者之を兩先生の根氣比べと稱し傳へて話柄と爲す、又以て濱尾總長が先生の辭任を惜むの如何に深かりしかを察知すべきなり。而して先生遂に留任に決せられたるが、同年六月帝國大學を東京帝國大學と改稱し、京都帝國大學と共に新に官制の公布となり、十一月濱尾氏總長を辭し、外山正一氏之れに代り、翌三十一年四月外山氏罷め、五月菊池大麓氏總長たるに及び、先生の辭任を以て已むべからずとなし、七月先生は願に依りて工科大學長を免ぜられたり。越えて明治三十六年三月特に東京帝國大學名譽教授の名稱を授けられ、永く學界に其の聲名を印せらるるに至れり。

## 第二節 工學院

明治二十年の頃我國には工業に關する學校極めて少なく、一二官立の學校ありしも、孰れも高等なる専門技師を養成するを方針とし、技師の指導の下に立ちて直接實施の任務に當るべき工手を養成する機關の設けなかりしを以て、時の帝國大學總長渡邊洪基氏は深く之れを慨し、此不備を補ふべき學校を創設せんとし、其の意を工科大學教授辰野金吾氏に傳へ、同年十月工學會常議員會に

諮らしめたるに、滿場一致の賛成を得たり。是に於て同月創立協議會を開き、其の出席者石橋絢彦(木)井口在屋(機)巖谷立太郎(山)大井才太郎(氣)辰野金吾(家)中村貞吉(學)中野初子(工)栗本廉(山)山口準之助(木)古市公威(木)藤本壽吉(家)三好晋六郎(船)水上彦太郎(機)杉村次郎(山)の十四氏を發起人とし、校名を工手學校と定め、其の組織は、土木・機械・電工・造家・造船・探鑛・冶金・製造舍密の八學科とし、課程は悉皆邦語を以て教授し、各學科共に本科一ヶ年、豫科半ヶ年、合計三學期一ヶ年半を以て卒業せしむることとし、渡邊洪基氏を創立委員長に推し、十一月諸規則を制定し、特に管理規則を設け、管理長、管理員、及び校長を置きて、本校全體を統率することとし、乃ち渡邊洪基氏を特選管理長に、古市先生、辰野金吾、中村貞吉の諸氏を管理員に、同時に中村氏を校長に推薦せり。

是時に當り同志の學士遠近相傳へ、校友と爲りて俱に力を效すもの五十有三名に達し、又或は金圓を寄附する特志者の有るありて、諸般の施設意外に速に其の緒に就けるを以て、當時木挽町に在りたる商工徒弟講習所を借用して假校舍に充て、明治二十一年一月初めて豫科生徒を募集し、二月六日開校式を擧げ、古市先生は土木學科教務主理を擔任して河工及び海工を講義せらる。而して是月本校設立趣意書を發表し、専門技師の補助工手養成の必要を陳ぶること左の如し、先生固より之れに與る。

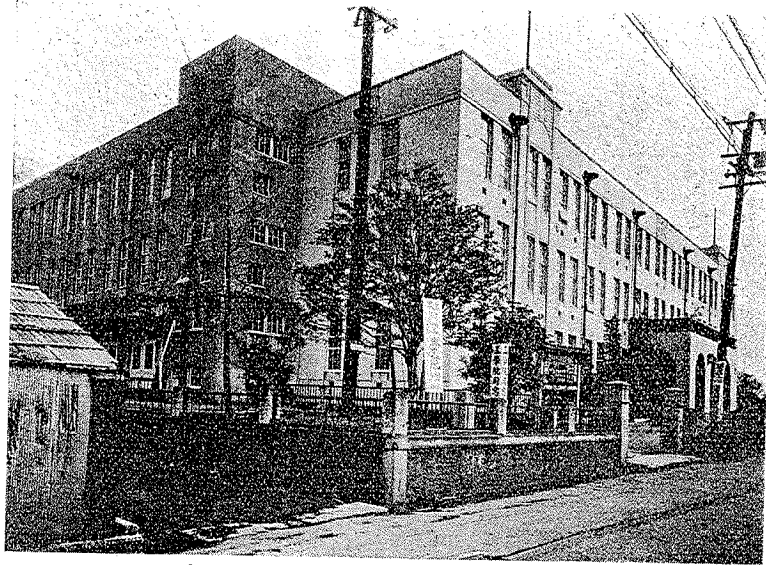
#### 工手學校設立趣旨

工業の隆盛を謀るには、學術の應用極めて緊要なり。現今我國の工業稍隆盛の機運に向ひ、鐵道敷設、道路開鑿、鑛山採掘、其他造船、建築、電氣、舍密製造等、數多の事業國內各所に興起し、是等の事業に必須なる技術者を要すること頗る多きに至りしは、畢竟工業は學術の應用を俟て始めて完良の結果を得べきが故なり。而るに今我國の有様にては技術者養成の費甚だ尠く、一ニ官立の學校に於ては、高尚なる技術を養成するに充分なるも、各専門技師の補助たるべき工手を養成する學校に至りては、亦一校の設置あるなし。故に工業家に於ては補助工手の供給なきに苦み、勢ひ學術應用の思想に乏しき者を以て、彼の高尚なる技師の補助と爲さざるを得ず、爲に技師は使役に不便を感じるのみならず、結局工業家の不利益を來すものにて、即ち我國工業進歩に一大障礙を與ふるものと云ふべし、是れ余輩の最も遺憾とする所なり。因て茲に一の工手學校を設立し、學科を土木、機械、電工、造家、造船、探鑛、冶金、製造舍密の八學科に分ち、世間有志の子弟、又は晝間各工場に使雇せらるる工手職工等に就學を許し、授業の方法は専ら速成を旨とし、所謂補助工手を養成し、以て我國工業の隆盛を企圖す。聊か記して本校設立の趣旨を陳ると云爾

同年九月京橋區南小田原町の新築校舍落成を告げ、同月八日移轉開校式を擧ぐ。十一月古市先生山縣内務大臣に隨行して歐洲視察の途に上り、其の獨逸に到るや、内務大臣は當時伯林に留學中の原田貞介氏をして先生の調査事項を補助せしむ、先生乃ち同氏を伴ひ先づ工手學校を參觀し、其の組織を調査し、且獨逸の學制を研究し、又工科大学を參觀し、原田氏に向つて曰く、我が日本に於け

る工業上目下の急務は、技手を養成するにあり、我輩歸朝の後は、更に此の方面に盡力する所あるべしと。

明治二十二年七月、先生尙歐洲に在るの時、本校第一回卒業式を舉行し、始めて證書を授けたる者百二十一名にして、就中土木學科最も多數を占め、二十九名の卒業生を出せり。尋で九月先生歸朝し、再び本校に教鞭を執られ、同二十九年一月まで繼續せらる。由來工科大學長として且は本邦土木學界の最高權威者としての先生が教壇に立たるるを以て、生徒は之れを感謝して喜ぶこと限りなし。是歲十月、眞野文二氏歐洲留學より歸朝し、工科大學教授に任ぜらるるや、後又本校に教鞭を執らる。一日試みに生徒に問ふて曰く、諸子は古市先生の講義を解し得る



昭和三年淀橋區角管新築せられたる工学院

かと、答へて曰く、之れを解するを得ず、然れども學界の最高權威者たる先生が吾等の學校に出でて講義せらるる事の感謝に堪へざるものあるなりと。其の衆望の歸する所實に斯くの如し。

明治二十五年七月、中村貞吉氏に代りて中澤岩太氏校長の職に就き、同年九月修業年限を改め、本科一ヶ年豫科一ヶ年、合計四學期二ヶ年とす。越えて二十九年二月第十四回卒業式の當夜、不幸にして校舎全部火災の厄に罹る、事天聽に達し、畏くも帝室より御下賜金の恩命を拜受し奉り、當事者感激措く所を知らず、忽ち復舊工事を促進せしめ、同年七月第十五回卒業式は之を新校舎に行ひ、爾後更に規模を擴張し、教室を増設したるも、生徒は益々増加して之れに收容すること能はざるの盛況を呈するに至れり。

明治三十年二月新に會計検査役を置き、古市先生と辰野金吾の二氏就任し、翌三十一年十二月本校を財團法人と爲し、監事及び理事を置くや、先生は監事に、辰野氏は理事に就任す。既にして同三十四年五月特選管理長渡邊洪基氏薨去し、六月古市先生は其の後任に推薦せられ、爾來本校を統裁し、或は規則を改正し、或は卒業生の爲に其の前途の進歩發展を計られ、明治三十七年二月、更に修業年限を本科一ヶ年半、豫科一ヶ年、合計五學期二ヶ年半と改められたり。

管理長として先生は卒業式に於て毎回訓示演説を行はれ、世界の大勢と之れが對應策及び我國工業界の現状並に將來の發展等に關して説述せらるるを常とす。今其の二三演説の例を擧ぐれば



明治三十八年七月第三十一回卒業式に於て、先づ來賓に對し學程を改正して五學期としたると、今日に至る迄の卒業生總數四千人以上に達したることを報じ、次に卒業生に向つて、目下工業界の不振状態を告げ、需用供給の關係上、卒業生の需用甚だ乏しと雖、之を以て決して悲むべからず、斯かる状態は一時の現象に過ぎず、日露戦争は永續性を有するものに非ずして、必ずや近く大勢挽回の機あるに至るべく、滿韓の經營は又我日本の天職なるを以て、諸子は宜しく忍耐して其の機を待つと共に、此間諸種の事業の見習として經驗を積み、以て將來の發達を計り、責任ある位置を得んとに努むれば、當に諸子の幸福たるのみならず、我國工業上亦一段の進歩を來す所以なりとて、實例を佛蘭西革命後に於ける英國工業の發達に引き、大いに激勵せられたり。

明治四十二年二月第三十五回卒業式に於ては、先づ來賓に向つて學校隆盛の状況、工業發展の實例、及び卒業生の供給は其の需用に應ずる能はざる好況を告げ、次に卒業生に向つて、日露戦役後の國債の膨脹と事業熱の熾烈なるとに對し、舉國一致して經濟上の難關を突破すべく、且此機を逸せず工業の振興に努力すべしと論じ、其の一例を獨逸に求め、獨逸の隆盛今日あるは國民一致の勤儉に依るものなるを以て、諸子は宜しく勤儉の二字を服膺して、其の職務に勉勵すれば、則ち本校に教育を受けたる恩義に酬めると共に、又國家に對する報效の道なりと力説せられたり。

更に大正二年七月第四十八回卒業式に於ては、來賓に對し本校創立以來滿二十五年に達したること、卒業生八千人の多きを出したること、本年より電氣高等科を設くるの三事を報告し、次に卒業生に向つて、日本が數百年を一躍して世界の一等國となれる實例を、軍艦製造の大々的計畫進歩に於て説明せられ、轉じて造船以外の工學科の未だ遜色あるに言及し、此遜色を脱して文明史の新紀元を飾るは諸子の責任に在りと激勵せられたり。

既にして大正十年七月、先生本校管理長を辭せられ、工學博士石黒五十二氏其の後任と爲りしが翌十一年一月石黒氏の薨去に依り、同年二月工學博士高松豊吉氏代つて管理長たり。然るに大正十二年九月の大震災に遭過し、築地小田原町の校舍灰燼に歸したるを以て、本校縁故者一同の奮起に依り、直ちに復興會を設立し、高松管理長は古市先生を會長に仰ぎ、自ら副會長と爲り、會長と共に復興資金の募集に盡力し、新に淀橋區角筈に鐵筋混凝土四階建の現代式壯麗なる校舍を新築するを得て、昭和四年七月之を工學院と改稱し、爾來毎年三千餘人の生徒を收容し、最近に至りては二萬有餘の卒業生を出すに至れるもの、多年先生が管理長として畫策せられ、管理長辭任の後と雖其の薨去に至る迄、理事として本學院の樞機に參與せられたるの致す所なり。

### 第三節 和佛法律學校

明治十三年佛國留學より歸朝せられたる古市先生は、工學士理學士の兩學位を有し、佛國の工學及び工業知識を我國に移植せる最初の學者にして、又之を實地に應用せられたる工學界第一の元老なり。明治十九年辻新次、山崎直胤、長田銚太郎、平山成信、寺内正毅、栗塚省吾の六氏と共に、佛學會と稱する學的團體の設立を發起せらる。其の目的は佛語及び佛蘭西の學問を修めたる當時の新人が同志を集めて學會を組織し、此學會の主要事業として佛蘭西語學校を建設せんとするに在り。而して此佛學會設立の提唱に賛成するもの尠からず、同年九月に至り本學會は創立せられ、辻新次氏は會長に、古市先生は理事に推され、且會計主務を兼ねたり。是に於て本學會の事業たる語學校の設立に着手し、翌明治二十年一月神田區小川町に開設するを得て、之を東京佛學校と稱し、先生は校長心得に推舉せられ、學校經營の衝に當られたるが、其の施設宜しきを得たるを以て、多數の學生を收容し、校運の發展期して待つべきものありたり。

是より先、明治十三年冬、佛蘭西語研究の爲に設立せられたる佛文會と稱する文化團體あり。此團體は佛學會と殆んど目的を同うし、且其の幹部中には佛學會の理事として兩者を兼帶する者ありしを以て、佛學會の創立後幾もなく之れが合體を交渉し來り、佛學會は之に應じ、會員の協賛を得て佛文會を併合すると共に、同會の學生を東京佛學校に收容せり。當時佛語佛學研究の機運漸く盛なるに至り、佛學會は更に學校の規模擴張を圖るの必要あるを以て、補助金の下附を司法省に

請願したるに、同省も時勢に鑑みて之を認め、明治二十年四月より毎年金五千圓を東京佛學校に補助することとせり。是に於て古市校長心得は、此補助金を基本として、校運の發展を期すべく計畫を立て、日佛教師の講義を増加し、且新に法律科を開講せり。斯くて同校の基礎確立し、其の將來亦見るべきものあるに及び、是歲先生は校長心得を辭し、専ら佛學會の理事並に會計主務として留任せられたり。

尋で明治二十二年、東京佛學校は東京法學院と合體して、和佛法律學校と改稱し、麴町區富士見町に移轉するや、先生は佛學會側を代表して、和佛法律學校の理事に就任し、隨時同校の經營狀態を佛學會に報告せられたり、此和佛法律學校は即ち現今の法政大學の前身なり。